

平成 27 年度

市立大町山岳博物館 企画展

山岳風景画の世界

さんぱく
—“山博”収蔵コレクション—

World of Mountain Arts, "SANPAKU" Collection
2015 Exhibition of Omachi Alpine Museum



平成 27 年度

市立大町山岳博物館 企画展

山岳風景画の世界

さんぱく
——“山博”収蔵コレクション——

World of Mountain Arts, "SANPAKU" Collection
2015 Exhibition of Omachi Alpine Museum

- 会 期 2015(平成27)年7月18日(土)～10月12日(月・祝)
※会期中の休館日は、9月7日(月)・14日(月)・24日(木)・28日(月)、10月5日(月)《7月・8月は無休》
- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 会 場 市立大町山岳博物館 特別展示室
- 観 覧 料 大人 400円 高校生 300円 小・中学生 200円
※常設展と共通、30名様以上の団体は各50円割引。そのほかの各種割引については窓口でお問い合わせください。
- 主 催 市立大町山岳博物館



洞沢にて新雪の穂高連峰を描く茨木猪之吉(昭和初期頃)
【茨木岳人氏所蔵】

目 次

	頁
ごあいさつ	3
山岳文化都市宣言／信州 山の日／山の日	4
展示解説・展示資料図版	5
展示作品目録	36
主要参考文献	37

展示構成

本展では、当館を含めた大町市が収蔵する美術資料のうち、明治期から現代までの作家による主に北アルプスなどの山岳を描いた風景画をテーマに定め、山岳風景画の体系的な資料群（コレクション）を形成し、その一部で展示を構成する。

なお、ここでとりあげるのは、日本山岳画協会に所属経験のある物故作家の作品を中心にする。展示は以下の各項目で行う。

- I 当館・大町市収蔵の山岳風景画コレクション
- II 山岳画家が愛用した登山道具

凡 例

- 1 本書は、市立大町山岳博物館において2015(平成27)年7月18日から10月12日まで開催する企画展「山岳風景画の世界 ―“山博”収蔵コレクション―」の展示解説書である。
- 2 写真や図表等の図版に付した番号は、展示パネルや展示資料のキャプションプレートの番号と共通するが、必ずしも実際の展示順序を示すものではない。なお、撮影者・提供者等の明記がない写真や図表等の図版は全て当館撮影あるいは所蔵・作成による。
- 3 資料名称は原則として所蔵先の呼称によるが、一部統一を図るため変更した。
- 4 会期中、企画展の内容については、展示替えを一部行う場合がある。
- 5 企画展の企画は、当館館長・鳥羽章人、副館長・清水隆寿、事務員・北村洋子、専門員・小坂共栄、指導員・西田均、宮野典夫、学芸員・千葉悟志、佐藤真、関悟志による。なお、本書の編集ならび執筆は関が担当した。

ごあいさつ

明治期の日本で受け入れられた水彩・油彩といった西洋画の技法。そうした画法で描かれた近代日本美術の風景画のなかでも、とくに山を主題として描いたものが山岳風景画（山岳画）です。このようにして山を主な画題として描く作家は「山岳画家」と称されています。

1936（昭和11）年、足立源一郎や茨木猪之吉といった画家たち総勢10名（12名とも）が創立会員となり、当時の国内登山界を主導していた小島烏水と藤木九三を顧問に迎え、「好んで山を描く画家の集団」として日本山岳画協会を立ち上げました。その創立に際し、創立会員のひとり中村清太郎が記した「日本山岳畫協會の創立に就て」という一文には、山岳画の特性や可能性が端的に分かりやすく述べられています。そこでは「山岳画」というものを「風景画」の一種と見なしても、主題とする山には特別な存在感があると特徴づけ、それこそ日本人ならではの美意識によった作画活動があるとし、今後の活動領域の広がりを探っています。さらに「山岳画」というものは山のみを描くのではなく、山にある動植物や山麓風景から山に関する神話や伝説などまで、有形無形にかかわらず全ての物事を対象に描かれるべきだと定義しています。

本展では、当館を含めた大町市が収蔵する美術資料のうち、日本山岳画協会の創立会員や初期の会員を中心に、明治期以降の作家が描いた北アルプスなどの山岳風景画作品16点を展示します。あわせて山岳画家が愛用した登山道具を展示します。

それぞれの山岳画家たちが各々の山に対する思いを作品に込めて表現した山岳風景画が持つ世界観を、ぜひ会場で感じていただければ幸いです。

最後になりましたが、本展にあたり、多大なご協力とご教示を賜りました皆様方に、心より深く感謝申し上げます。

2015（平成27）年7月18日

市立大町山岳博物館
館長 鳥羽章人

参考抜粋 日本山岳畫協會の創立に就て 中村 清太郎

日本山岳畫協會は一言で申せば好んで山を描く畫家の集團でありまして、今迄夫れ夫れその道に精進して居た人々を横に連ねて、互に親しみを増し、作畫にも發表にも便宜を加へ、觀賞や研讀（原文ママ）の機を多くしやうといふやうなわけであります。

現在會員は至つて少數であります、追々その數も増すことを期待して居ます。規約に「山岳を崇敬愛好する」といふ文字を掲げてありますが、畫の仕事ですから個性の尊重すべきは勿論ながら、さういつた氣持が無ければ殊に山岳畫といふやうな藝術品は出来るもので無いと信ずるのであります。山岳畫を大體風景畫の一種と見ても、その主題たるあの大地の高揚した天邊の氣高さ、壯大さ、不思議さ、力強さ、その美しさには、又格別のものがあると思ひます。又その邊に、特に日本人に俟（ま）つ仕事があるやうに思はれます。

但こゝにいふ山岳畫とは、其題材を山頂とか山中とか狭く限定する様なものでは決して無く、遠望も山麓も其他溪谷、湖沼、草木、禽獸等の山に屬するものは固（もと）より、天象、人生、神話、傳説の類まで、山に關する限りは現實非現實に拘はらず包含されて然るべきものと考へられます。

斯（こ）ういつた會は既に存在して居ていゝ筈のものとも思はれるのでありまして、事實随分前からさういふ話は折に觸れ持ち上つてゐたのですが、同志も少なく兎角銘々の仕事にかまけて中々實現に至らなかつたのです。それが最近熱心な若い人々に依て促進された形で、今度は割合にスラスラと成立に至つたのであります。思へば誠に自然の勢とも申すべきであります。

草創の際で廣く會員を求める遣（いとま）も無いのでありますが、少數とはいへ現在の會員中には、夙（つと）く明治年代から山岳を描いて世に示した先覺者も居られ、一方には畏（おそ）るべき前途を有する年少の作家を含み、又後見といふやうな役廻りに山岳畫には因縁甚だ深き山岳文學の老先達を煩はすを得たのは、會の門出として大に心強い感が致すのであります。

（中略）

日本山岳會とは一面正に同胞の會と申すべきものでもあり、同會員諸賢の親愛を希（こいねが）ふ次第であります。（後略）

【日本山岳會編『會報』55號（日本山岳會、1936）】

「山岳文化都市宣言」

私たちの大町市は、雄大な北アルプスのパノラマを代表とする、四季折々の変化に富んだ豊かで美しい大自然に恵まれています。

北アルプスの山麓で生まれ、育ってきた市民は、その長い歴史を通じて、山岳がもたらす豊かな自然環境の恵みを受けながら、自然と人とが共生する独自の山岳文化を形成してきました。

私たちは、先人たちが守り育ててきた山岳文化を受け継ぎ、かけがえのない豊かで美しい自然を次の世代に伝えていかなければなりません。

21世紀を迎えた今日、身近な生活環境の改善から地球環境の保全まで、様々な環境問題への取り組みが重視される中で、本市においても、市民、事業者、行政等が協働と連携を図りながら、新しい時代の課題や要求に応える山岳文化の振興が求められています。

本市における山岳文化の拠点である山岳博物館開館 50 周年の節目にあたり、山岳博物館創設当時の理念に学びながら、「環境の世紀」と言われる 21 世紀にふさわしい山岳文化の発展と創造をめざして、大町市を自然と人とが共生する「山岳文化都市」とすることを宣言します。

2002 (平成 14) 年 3 月 15 日

大町市

「信州 山の日」

7 月第 4 日曜日 ※ 2015 (平成 27) 年は 7 月 26 日

長野県は、県土の約 8 割を森林が占める全国有数の森林県です。この森林を水源とする豊富な水は、本県はもとより下流域の都市部へもその恩恵をもたらしています。また、全国に 23 座ある 3,000m 峰のうち 15 座を有する日本一の山岳と固有の生き物たちの宝庫である高原には、県内外から毎年 70 万人を超える人たちが訪れるなど、山が与えてくれる様々な「恵み」は私たちの生活になくてはならない貴重な財産です。

長野県民共通の財産であり、貴重な資源である「山」に感謝し、「山の恵み」を将来にわたり持続的に享受していくため、県では長野県独自の「山の日」を制定します。

2014 (平成 26) 年

長野県

「山の日」

一山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する— 8 月 11 日 ※2016(平成28)年から

国民の祝日に関する法律の一部を改正する法律(平成 26 年法律第 43 号) が 2014(平成 26)年 5 月 30 日に公布され、「国民の祝日」として新たに「山の日」が設けられることになりました。

2016 (平成 28) 年 1 月 1 日 施行

内閣府



I 当館・大町市収蔵の山岳風景コレクション

おしたとうじろう ろくがつ ほたかだけ
大下藤次郎 六月の穂高岳

『山岳』第2年第3号（山岳會事務所、1907）によると、1907（明治40）年7月18日と20日の両日、午後4時から7時ころまで写生し、なるべく主観を除いてただ見えるまま素直に描いたのがこの作品であると作者の大下藤次郎自身は述べている（「口繪穂高山残雪寫生の旅行談及び所感」）。この作品は前掲『山岳』の口絵を飾り、そこでは「穂高山の残雪」と題されている。この作品のほかにも、ほぼ同じ構図の作品「穂高山の残雪」（1907年 水彩・紙 22.2×33.2cm 島根県立石見美術館蔵）が残されている。

藤次郎はこれらの作品を描いたときの状況を次のようにも後述している。

橋を渡り、宿近くの笹原から、雪の穂高を写し始めた。暮れゆく空の感じもよい、麓に立てる枯木の白きもよく調和する。（中略）前々日の半成なりし、橋手前の写生を続け、薄暮宿へ帰つた。

【大下藤次郎著「穂高山の麓」『みづゑ』52号（1909） 同著／近藤信行編『大下藤次郎紀行文集』（美術出版社、1986）収録】

描かれた作品からは、のびのびとしたスケッチの雰囲気伝わり、自然美を描くために悠々と絵筆を運んでいる姿が想像できそうだが、実際はこのとき写生した場所は虫が多くて手で追い払っても逃げず、ブヨやハエや蚊に顔や手など露出した部分を刺され、かゆみと痛さに苦しめられながら描いたと紀行文の中で述べている。

「六月の穂高岳」は藤次郎と親交の深かった小島烏水（うすい）が旧蔵していた。藤次郎の上高地訪問はこのときがはじめてで、烏水に薦められてのことであった。藤次郎は友人で画家の磯部忠一（ただかず）を誘って、この上高地への写生旅行に出発。ふたりは東京から汽車で諏訪経由にて松本へ行き、ここから馬車で島々へ。島々で岡田作次という案内者兼荷物持ちを雇い、徒歩で徳本峠を越えて上高地入りした。そして、上高地温泉に5泊し、周辺で写生をして過ごした。



モチーフ：梓川・岳沢出合付近（岳沢湿原付近）から望む穂高連峰

（写真撮影場所：【写真左】梓川・岳沢出合付近（梓川右岸）、【写真右】岳沢湿原付近）



※この地図は、国土地理院の電子地形図（タイル）を使用し、地点表示等を加えて作成したものである。

※作品の画面奥、中央に描かれた山は奥穂高岳で左には間ノ岳や西穂高岳が連なり、谷間には残雪が見える。こうした山容は、現在の梓川・岳沢出合、梓川右岸付近から望む風景に近いと思われる。作品の前景には笹であろうか一面のじゅうたんのようなか緑の中に梅の白い枯木が立ち、中景には柳の仲間であろうか広葉樹の林から青々とした枝葉を茂らせた一段と背の高い梅と思われる針葉樹がところどころ頭を伸ばしている。こうした周辺の樹木等の様子は100余年前の作画当時からは変化していると考えられるが、現在、この付近から作品の前景・中景に描かれたような立木越しに穂高連峰をのぞいて見通せる場所は、岳沢湿原付近であった。ただし、これは湿原内に設置された木道上からに限ってのことであり、作品と同様の風景を望める詳細な地点を特定するには至らなかった。そのため、ここでは参考として上記2ヶ所の地点で撮影した写真を挙げた。



1 - 大下藤次郎《六月の穂高岳》
1907(明治40)年 水彩・紙 31.0×48.0cm 当館蔵

大下藤次郎 OSHITA Tojiro
1870(明治3)年～1911(明治44)年
東京都出身
太平洋画会、日本水彩画会などに所属
中丸精十郎、原田直次郎に師事

大正時代の吉田博は毎夏2ヵ月前後を北アルプスや南アルプスなどの山中で過ごしたという。もちろん作画のための登山であった。その魅力を博は次のように述べている。

登山と畫（ゑ）とは、今では私の生活から切離すことのできないものとなつてゐる。畫は私の本業であるが、その題材として、山のさまざまな風景ほど、私の心を惹きつけるものはない。／味はへば味はふほど、山の風景には深い美が潜められてゐる。（中略）／山は、登ればそれでよいといふものではない。登つて、そこに無限の美を感受するのが、登山の最後の喜びではないだろうか。

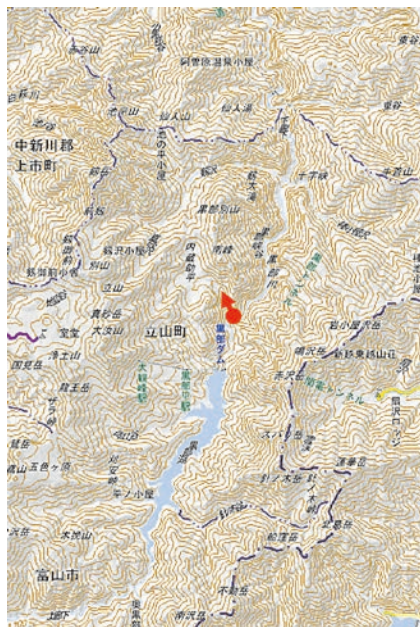
【吉田博著『高山の美を語る』（實業之日本社、1931）】

この作品の初版（初摺）を含む一連の木版画シリーズ「日本アルプス十二題」が制作発表されたのは1926（大正15）年のことであった。同シリーズでは、北アルプスの山岳風景に加えて、登山や野営中の人物、ライチョウやコマクサといった高山帯の野生動植物などがモチーフとされている。

作品に取材された黒部川について、博は“高山美”における“断崖美”のひとつとしてとらえ、次のように述べている。

黒部川こそは文字通り幽谷であつて、聳（そそ）り立つ絶壁の底に流れてゐるのは、澄明（ちやうめい）たところのものない水である。その水底（すいてい）には一々指摘することのできる、鮮やかな色彩を帯びた石が沈んでゐる。これこそ高山谿谷美の極致（きよくち）である。宜（むべ）なる哉、水の綺麗な日本でも、黒部川を流れる水ほど澄み透つたものはない。しかも上流約二十里の間は、雨が降つても水の濁るといふことがないのだから、いつそ神秘そのものにも譬（たと）へられやうではないか。

【前掲同書】



※この地図は、国土地理院の電子地形図（タイル）を使用し、地点表示等を加えて作成したものである。

モチーフ：黒部川

（写真撮影場所：黒部川内蔵助出合）

※作品に描かれた場所は不詳であるため、写真は黒部川のイメージとして挙げた。地図は写真撮影場所を示した。



2 - 吉田 博《日本アルプス十二題の内 黒部川》
1992(平成4)年※ 木版多色・紙 38.5×26.5cm 大町市常盤公民館蔵
※初版の制作発表は1926(大正15)年

吉田 博 YOSHIDA Hiroshi
1876(明治9)年～1950(昭和25)年
福岡県出身
太平洋画会、日本山岳画協会などに所属
田村宗立、小山正太郎に師事

大正・昭和初期、急速な変遷をみせた国内の近代登山を取り巻く情勢にあって、当時使われはじめた「山岳画家」や「登山家」といった肩書きの響きに、明治末期から作画のために山旅を重ねてきた茨木猪之吉自身は多少の違和感を持っていたようである。これに関して自虐的な表現で皮肉を込めつつ次のように述べている。

あのころは山好きの仲間が集まって、いい氣持で暮した。〈中略〉いつか過去になり今日では立派に登山家と祭られる、〈中略〉新らしい名稱はどん、現れ全く文化のお蔭か、頭のよくない吾々はどうしたらいいか、當世風の繪も描けず（別に描きたくもない）山が好きで繪も勿論、慾張つて山岳畫家と決めて見たが、どうも山岳畫家らしい點がない。近ごろ大分焼が廻つたのか、若い連中と酒ばかり飲んで遠くから眺めて、山麓畫家だぞ、なんて何處からか放送されさうだ。

【茨木猪之吉著「岳人の欠伸（あくび）」『山旅の素描』（三省堂、1940）】

この作品は、国内有数の氷河圏谷である涸沢カールから望む北アルプス穂高連峰を描いた作品である。画面中央奥に北穂高岳、その左側には北穂山頂への登山路がつく南稜が屹立し、反対の右側には「ゴジラの背」と呼ばれる峨々とした東稜が描かれている。作品を描いたと思われる場所は、現在の涸沢ヒュッテのヘリポート付近にある池の平。池の平という名は、残雪が消え去った後、毎年秋になってこの場所に姿を現わす「涸沢ノ池」という小さな池にちなむ。

猪之吉は上高地周辺によく滞在した。猪之吉は1944（昭和19）年10月2日の朝に涸沢小屋を出発し、涸沢岳と奥穂高岳との鞍部にあたる白出（しらだし）のCOLから白出沢を飛騨側に下ってから消息を絶った。その前年、最後の山行と重なる場所で描かれたのがこの作品である。



モチーフ：涸沢・池の平から望む穂高連峰
（撮影場所：涸沢・池の平〈涸沢ノ池付近〉）



※この地図は、国土地理院の電子地形図（タイル）を使用し、地点表示等を加えて作成したものである。



3 - 茨木猪之吉《穂高 澗沢 池の平》
1943(昭和18)年 油彩・キャンバス 38.0×45.5cm 当館蔵

茨木猪之吉 IBARAKI Inokichi

1888(明治21)年～1944(昭和19)年
静岡県出身

日本山岳画協会に所属

山田馬介、浅井忠、小山正太郎、中村不折
に師事

「立山残雪」は1936（昭和11）年7月に日本橋・高島屋で開催された日本山岳画協会の第1回展に中村清太郎が出展した7点のうちのひとつである。前景となるハイマツと残雪の斜面の奥、うっすらとした白いガスが湧きあがるなかに、雄山・大汝山・富士ノ折立の三峰からなる立山が残雪をまとった姿でどっしりと描かれている。

清太郎は山での作画について次のように記している。

好きな山へ入って絵を描いてみると、つひ永くなり、その間にはいろいろな面白いことにも出會ふ。元來私は遅筆の方だし、それに山は變幻自在だから、實際筆を動かしてゐるより、眺めてゐる時間の方が多いかも知れない。（中略）描いてゐる道程が楽しいのだ。出來上る一といふより「止めさせられる」時分は、どうもみじめな氣持になることが多い。

【中村清太郎著「畫筆を擱（お）いて 一山籠りの覺え書き」『山と溪谷』第50號（山と溪谷社、1938）】

清太郎は青春期、日本近代登山の探検時代において先駆的な登山を行ったことで知られる。例えば、1910（明治43）年7月から8月には辻本満丸、三枝威之介とともに鹿島槍ヶ岳から蓮華岳までの後立山連峰や三俣蓮華岳など黒部源流の山々をへて槍ヶ岳までの大縦走を行っている。余談になるが、この登山で清太郎が携えたピッケルは近所の鍛冶屋に打たせた私製品であり、清太郎は「わが国初のピッケル」と称している。また、少年時代に昆虫標本の採集にのめり込んでいた清太郎は、この登山の最中に新種となる日本産の高山蝶を発見・採取し、クモツマキチョウという和名が付けられている。

日本山岳会の機関誌『山岳』や小島烏水の著書などに作品を提供したほか、自身も山に関する著書を出版するなど、画業にとどまらず文芸においても活動の軌跡を残した。



モチーフ：室堂平から望む立山連峰
（撮影場所：室堂平）



※この地図は、国土地理院の電子地形図（タイル）を使用し、地点表示等を加えて作成したものである。



4 - 中村清太郎《立山残雪》
制作年不詳 油彩・キャンバス 65.0×80.5cm 当館蔵

中村清太郎 NAKAMURA Seitaro
1888(明治21)年～1967(昭和42)年
東京都出身
日本山岳画協会に所属
川端玉章、岡田三郎助、藤島武二に師事



5 - 中村清太郎《ハイマツ》
制作年不詳 油彩・キャンバス 33.5×45.5cm 当館蔵



6 - 中村清太郎《エーデルワイス》
制作年不詳 油彩・板 34.0×25.0cm 当館蔵

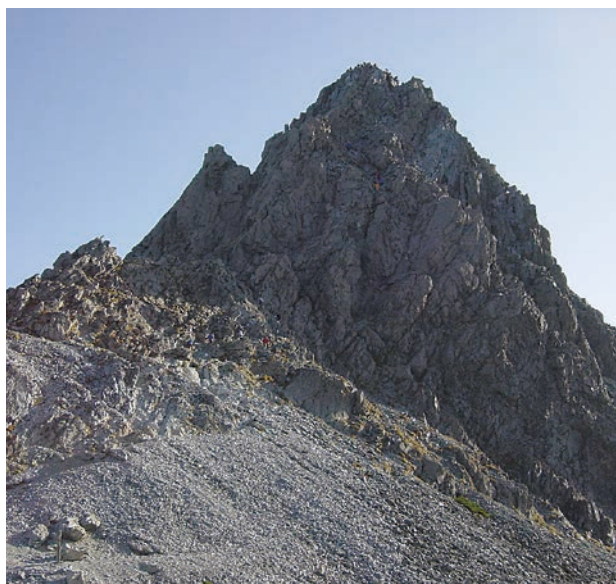
あだちげんいちろう ひがさ にしかま お ね きたほたか まえほたか やりひがしかま お ね つるぎだけつる が ごぜん
足立源一郎 日暈 西鎌尾根にて／北穂高と前穂高 槍 東 鎌尾根にて／劔嶽 鶴ヶ御前にて

「日暈 西鎌尾根にて」は、槍ヶ岳西鎌尾根から槍ヶ岳山頂付近を描いた作品である。白い薄雲が棚引く真っ青な上空に向かって、険しい峰をそびえ立たせた大槍と小槍。その上に現われた日暈。日暈とは、高い空に浮いた巻層雲（けんそううん）という薄い雲の中にある氷の結晶に太陽の光が当たり、屈折や反射によって太陽の周りに虹色の光の環（わ）ができる現象をいう。日暈が現われると天気が下り坂になるという観天望気（かんでんぼうき＝気象に関することわざや言い伝え）がある。

「日暈」と題された足立源一郎の作品はほかにもある。同じ1947（昭和22）年に制作された作品「槍ヶ岳 日暈」（油彩・キャンバス 34.9×27.4cm 長野県信濃美術館蔵）は、当館の所蔵作品とほぼ同様の構図だが、こちらの作品には太陽自体が描き込まれている。

足立朗編『画家 足立源一郎の記録』（三好企画、2002）から、これらの作品が制作（あるいは取材）されたと思われる当時の記録をひも解いてみる。

1946（昭和21）年7月上旬に上高地から北アルプスへ入山した源一郎は肩の小屋（現槍ヶ岳山荘）をベースに作画活動し、一旦下山する。その後、再び入山して7月中旬から8月初めまで槍ヶ岳周辺でスケッチなどをして過ごす。同年7月29日の日記には、「西鎌尾根、中崎山出合まで下りて槍を写す。微雲出づと見る間に槍の直上にかゝりし太陽に暈かゝりて見事なり。後、霧となる。台風之余波ならん」とあり、槍ヶ岳山頂の上空に現われた日暈を目にしたときの様子が記されている。



モチーフ：槍ヶ岳西鎌尾根から望む槍ヶ岳、日暈

（写真撮影場所：【写真左】 槍ヶ岳山荘付近、【写真右※】 大町エネルギー博物館）

※【上原達宏氏撮影・提供】



※この地図は、国土地理院の電子地形図（タイル）を使用し、地点表示等を加えて作成したものである。



7 - 足立源一郎《日暈 西鎌尾根にて》

1947(昭和22)年 油彩・キャンバス 45.3×52.7cm 当館蔵

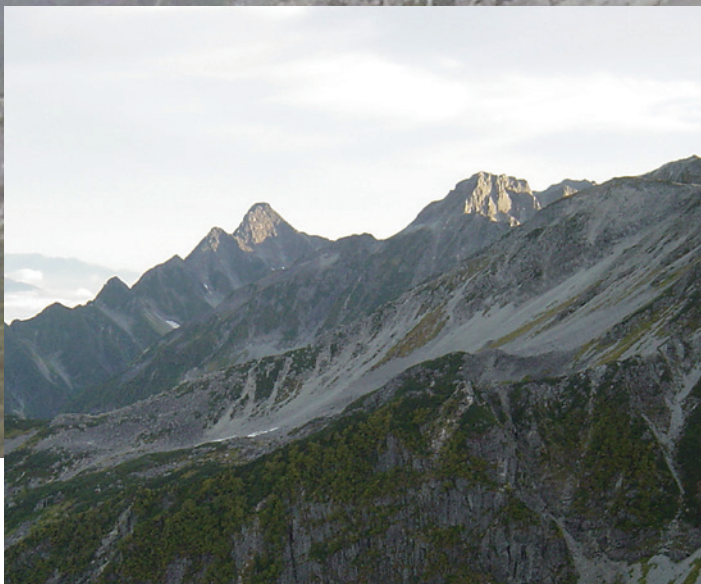
足立源一郎 ADACHI Genichiro

1889(明治22)年～1973(昭和48)年

大阪府出身

春陽会、創元会、日本山岳画協会に所属

浅井忠、鹿子木孟郎らに師事



モチーフ：槍ヶ岳東鎌尾根から望む穂高連峰
(撮影場所：ヒュッテ大槍付近)



※この地図は、国土地理院の電子地形図（タイル）を使用し、地点表示等を加えて作成したものである。



8 - 足立源一郎《北穂高と前穂高 槍東鎌尾根にて》
制作年不詳 油彩・キャンバス 45.5×53.0cm 当館蔵



モチーフ：劔御前山（鶴ヶ御前）から望む劔岳
（撮影場所：劔御前山山頂付近）



※この地図は、国土地理院の電子地形図（タイル）を使用し、地点表示等を加えて作成したものである。



9 - 足立源一郎《劔嶽 鶴ヶ御前にて》
1959(昭和34)年 油彩・キャンバス 27.0×35.0cm 当館蔵

山川勇一郎は1958（昭和33）年、作家・深田久弥、写真家・風見武秀、医師・古原和美の三氏とともにネパールのジュガル・ヒマールとランタン・ヒマール地域を探索した。勇一郎はこのとき作画した成果を一冊の画集にまとめて翌年刊行。バラエティに富んだ肩書きをもつ個性的な4名からなる探索隊のパーティーは“ヒマラヤン・クルレット”を自称し、その隊長を務めた深田久弥は先述の画集に寄せた序文で勇一郎について次のように述べている。

（前略）育ちのいいせいもあって、おっとりしてコセコセしない。先を争ったり、他を押しよせたりはしない。私が前から山川君の絵が大好きだったのは、そういう性格が現われているからである。軽薄やコケオドシのない、誠実なおおらかな絵である。／一緒に山を歩いていると、大きな図体に似ず、山川君は実にやさしい心を持っている。道端の名もない草花や、小鳥や犬や猫や、そんなものに無関心で通りすぎるのが出来ない。言葉の通じない山の住民が一番なついたのも山川君の自然な笑顔だった。そういう心のあたたかさが彼の絵ににじみ出ている。

【深田久弥著「ヒマラヤ画集によせて」山川勇一郎著『ヒマラヤ画集』（山と溪谷社、1959）】

勇一郎の最期は南米アンデス山脈の山中であった。単身チリ滞在中の1965（昭和40）年、氷河のクレバスに転落し、3日後に救出されるも命を落とした。3ヶ月の予定であったチリ滞在が1年7ヶ月にもなっていた最中のことであった。滞在拠点としたサンチャゴの町では、先述の深田久弥が記したヒマラヤでの様子と同様、勇一郎はチリの人びとを愛し、チリの人びとから愛された。その交流の証に現地には「画家山川勇一郎 愛する山に死す 1965年11月」とスペイン語で刻まれた碑が建てられている。

この作品は、槍ヶ岳から中岳へ至る稜線上、大喰岳付近から穂高連峰（奥穂高岳、涸沢岳、北穂高岳、前穂高岳、西穂高岳、明神岳など）の方面を望んで描かれたもの。穂高連峰は劔岳、谷川岳とともに日本三大岩場に数えられており、画面からはそうした“岩の殿堂”の迫力が伝わる。



モチーフ：大喰岳付近から望む中岳・南岳・大キレット・穂高連峰
（撮影場所：槍ヶ岳山頂）

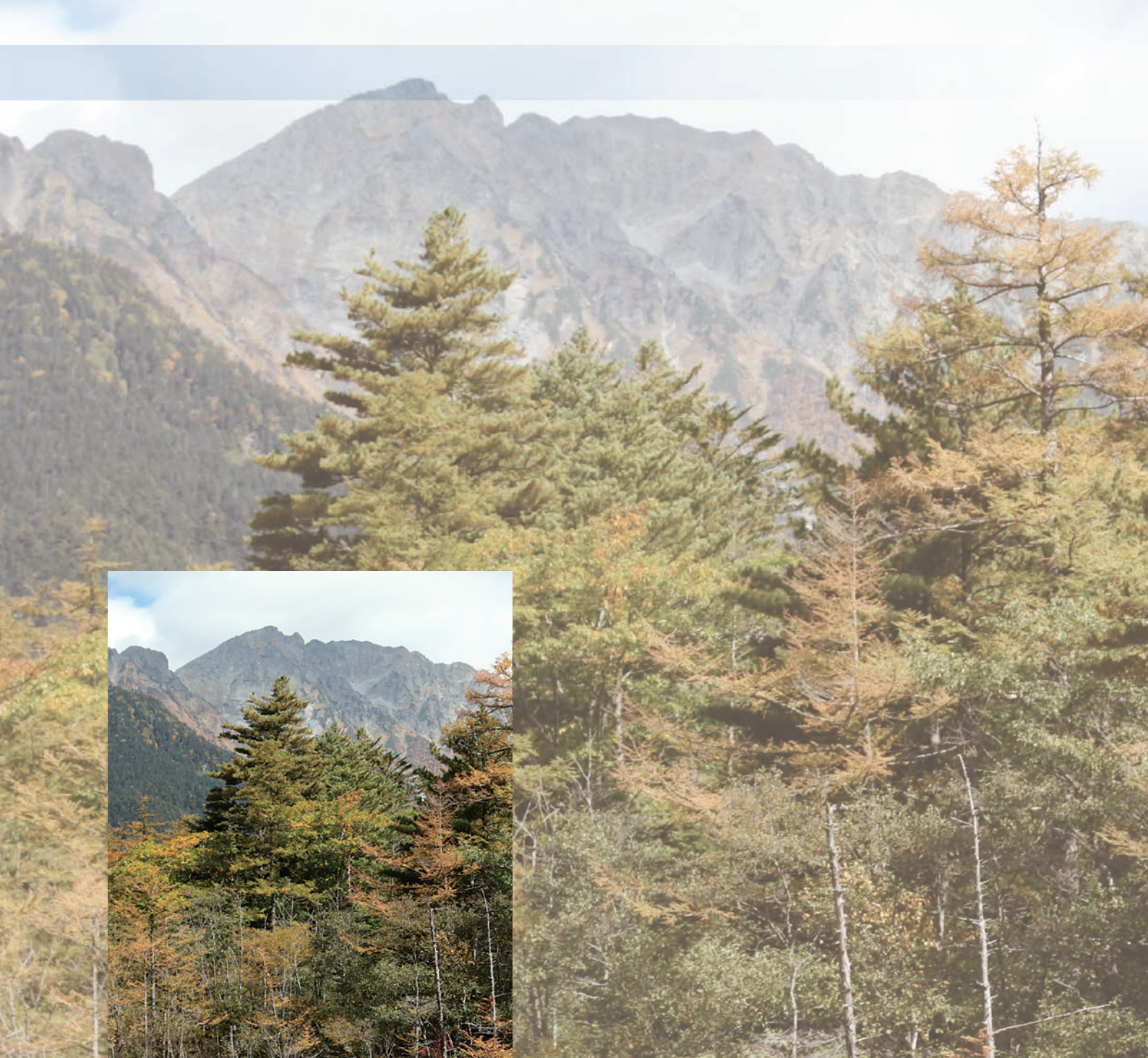


※この地図は、国土地理院の電子地形図（タイル）を使用し、地点表示等を加えて作成したものである。

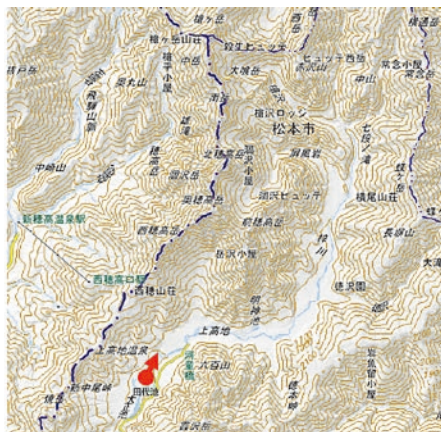


10－ 山川勇一郎《穂高山塊》
制作年不詳 油彩・キャンバス 45.7×72.8cm 当館蔵

山川勇一郎 YAMAKAWA Yuichiro
1909(明治42)年～1965(昭和40)年
兵庫県出身
一水会、日本山岳画協会に所属
安井曾太郎に師事



モチーフ：田代池から望む奥穂高岳
(撮影場所：田代池付近)



※この地図は、国土地理院の電子地形図（タイル）を使用し、地点表示等を加えて作成したものである。



11－ 山川勇一郎《田代池》
制作年不詳 油彩・板 27.3×22.0cm 当館蔵



モチーフ：大正池から望む穂高連峰
(撮影場所：大正池東岸)



※この地図は、国土地理院の電子地形図（タイル）を使用し、地点表示等を加えて作成したものである。



12- 山川勇一郎《大正池の奥穂》

制作年不詳 油彩・キャンバス 31.8×41.0cm 当館蔵

森の木々の間にライチョウのようにも見える不思議な鳥がひそみ、こけし人形のような姿をした髭面の人物が両手を前にジッと眼玉をそろえてたたずむ……。『鳥のすむ森』と題されたこの作品は、畦地梅太郎の版画を代表する存在である“山男”を主題とした作品群のひとつである。

道がふたたび急な登りになると、もうあたりはうっそうとした深林で、登る道も水気をふくみしっとりとしていた。なんという鳥か枝から枝へ音をたてて飛んでいるようであったが、ついに鳥の姿を見なかった。

【畦地梅太郎著「十文字峠越え」『山の足音』（創文社、1960）】

“山男”が梅太郎の作品に登場しはじめたのは1950年代に入ってからであった。その後、この“山男”を主題にした制作を重ね、“山の生きもの”や“家族”などの題材を加えながら、多種多様なヴァリエーションに富んだ“山男”シリーズを展開させていった。

“山男”は梅太郎自身ではないかという人びとの問いに対して、「里の生活から抜け出して山のひとときを楽しんでいる人間の姿、それが〈山男〉じゃと思うてもらえば一番いい」※と答えている。また、山鳥やライチョウなどの動物については、「（前略）独りの山の中で、「生きているものに会う、そのときわたしはほっとするんです。そのほっとした気持ちが、例えば雷鳥をだいている画になる」※とし、さらに「〈山男〉のようなああいう今の姿をやっても別にモデルがあるわけじゃない。あの中にあるもの、裏にあるものはわたしなんです。〈山男〉はわたしなんです。〈山男〉を通じて自分の気持ちを出してゆくということなんです。よく人から、モデルは誰じゃ、なんていわれるんですが、モデルはいないんです」※と述べている。

この作品は、現実の風景への忠実性という部分では一般的な山岳風景画とは趣を異にするが、イメージとしての“山男”による表現を通じ、梅太郎が山で感じた感動を心象風景として描いた山岳画として、観る者を惹きつける。

※大谷一良著「解説―畦地さんの『山の眼玉』」畦地梅太郎著 平凡社ライブラリー 313『山の眼玉』（平凡社、1999）



モチーフ：山男（燕山荘前の畦地梅太郎作「山男」石像）【左】、ライチョウ【右】

※これらは作品に描かれた直接のモチーフではないが、参考写真として挙げた。



13 - 畦地梅太郎《鳥のすむ森》
1975(昭和50)年 木版多色・紙 39.0×29.0cm 当館蔵

畦地梅太郎 AZECHI Umetaro
1902(明治35)年～1999(平成11)年
愛媛県出身
日本版画協会、日本山岳画協会に所属
平塚運一らに師事

これは1986(昭和61)年の第18回日展に出品された作品である。足立真一郎は1973(昭和48)年に白馬村北城落倉に別荘を建ててアトリエとした。そこから通ったのであろう、この作品と同じく杣池高原をモチーフにした作品をほかにも描いている。

夏になると草いきれのする山麓を、重いザックを背おってむやみやたらに歩くのが好きだった私(後略)。(「夏山のころ」)

時には絵など描かなくともいいから、のんびりとひるねでもしたくなってしまう私なのだ。(「五月の尾根」)

夏の山で眼前にお花畑が開けたときなど一度はそこに腰をおろして、その花卉に手をふれたり、また携帯の食料などだしてゆっくりと自然をたのしみたくなるものである。私など絵を描くことよりまっさきに花卉にふれてみたくなるほうである。(「夏山の名残り」)

人はみかけだけではわからないものだ。深く交わってこそ、その人の良さもわかってくる。／山のよさもそんな気がする。ただ登る人の心のありかたによって価値づけられるのではないかと思う。(「夏山断想」)

【足立真一郎著 新ハイキング選書第7巻『山旅素描』(新ハイキング社、1988)】

画面左上に描かれた、緑鮮やかな高原に建つ建物は旧杣池ヒュッテである。このヒュッテは1933(昭和8)年に白馬館が杣池湿原の入口に建てた木造3階建ての山小屋で、白馬三山などの北アルプスへの登山や、杣池から天狗原周辺の天然ゲレンデでの山スキーのベースハウスとして利用されたが、1999(平成11)年に移転・新築された。その際、旧建物は保存され、2002(平成14)年に小谷村によって「杣池ヒュッテ記念館」として整備されている。

杣池湿原は標高1,860mから2,020m付近の山腹に広がる高層湿原で、中部山岳国立公園の第1種特別地域となっている。また、一帯は1970(昭和45)年から長野県によって「杣池自然園」(総面積100ha、1周約5.5kmの遊歩道設置)として整備されている。白馬山麓ではシラビソのことをツガ(杣)あるいはトガと呼ぶそうで、杣池という地名はこの場所にオオシラビソが多く生育し、池が点在していることに由来しているという。



モチーフ：杣池湿原
(撮影場所：杣池自然園)



※この地図は、国土地理院の電子地形図(タイル)を使用し、地点表示等を加えて作成したものである。



14－ 足立真一郎《夏の梅池高原》
1986(昭和61)年 油彩・キャンバス 130.0×160.0cm 当館蔵

足立真一郎 ADACHI Shinichiro
1904(明治37)年～1994(平成6)年
栃木県出身
光風会、日本山岳画協会などに所属

1968（昭和43）年に日本ヒマラヤ協会（HAJ）が設立されると、同会会員となった藤江幾太郎はその年に実施された同会第1回例会のポカラ班に参加し、初めてネパールを訪れた。そのとき眼にしたヒマラヤは、幾太郎の絵心に最大級の感動を与えたという。以後、ネパールを何度となく訪れ、自身が所属する白日会展に1969（昭和44）年から「ネパール・シリーズ」として連続して作品を発表した。

1987（昭和62）年の第63回白日展に出品したこの作品について、藤江は次のように述べている。

昭和61年にナムチェ村を再訪した。前回から14年経って、屋根がカラートタンになったり大分ハイカラになったが、コンデの山は相変わらずボテコシ谷の向うに聳えて威圧する。この前お世話になった村長の家の前庭で写生したが、村長は村の中央に新しいロッジを建てた。ビューロッジという。

【北荘画廊制作『藤江幾太郎 ネパール画集』（北荘画廊、1990）】

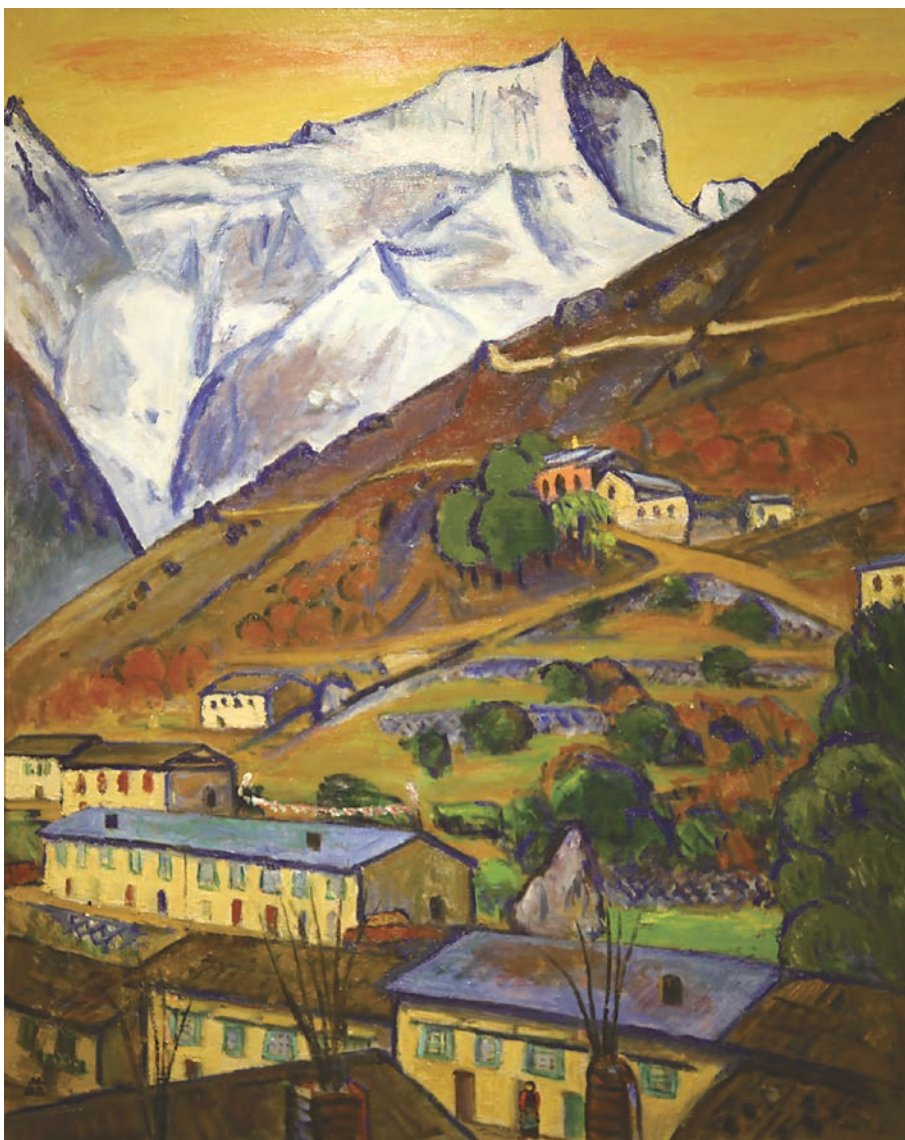
作品に描かれたヒマラヤの山村ことナムチェ村はナムチェ・バザールのことで、ネパールの首都カトマンズから東に約150km、標高3,440mに位置する。エベレストなどの8,000m峰を抱えるクーンブ地方における最大規模の集落で、ヒマラヤ登山の拠点として知られている。集落の建物や道が続く傾斜地の奥に迫るように描かれているのは、ヒマラヤ山脈の一峰であるコンデ・リ（標高6,187m）。この山は西峰、南峰、東峰、西峰と南峰の間の無名峰4つのピークをもつ。集落からはドゥド・コシの支流ボテ・コシが流れる深い谷をへだて、聳（そび）えて見える。

今年2015（平成27）年4月25日に発生したマグニチュード7.8というネパール中部の大地震では、首都カトマンズなどで多くの建物が倒壊して甚大な被害が出ている。本稿執筆時点では地震発生から間もないことからネパールの山間部での被害状況についての詳しい情報は乏しく、その後の余震被害も含め、ナムチェ・バザールの状況が心配されるところである。



モチーフ：ナムチェ・バザール（手前）とコンデ・リ（奥）
（撮影場所：ネパール ナムチェ・バザール付近）
【小林貞幸氏撮影・提供】





15－ 藤江幾太郎《ヒマラヤの山村》
1987(昭和62)年 油彩・キャンバス 162.1×130.3cm 当館蔵

藤江幾太郎 FUJIE Ikutaro
1910(明治43)年～2001(平成13)年
神奈川県出身
白日会、日本山岳画協会などに所属
中邨善太郎、松島一郎、石井柏亭らに師事

牧潤一はアメリカ大使館広報文化交流局に勤務するかたわら、1970年代頃から、アルプス、アンデス、ヒマラヤ、カラコルムなどの山脈にある峰々から自選「世界百名山」を“群像としての山”のようにして描くことを念頭に、長年にわたって世界各地を写生旅行して巡った。

「君、山の絵は山の肖像画であってはいけないよ」と言って下さった大先輩もいます。しかし肖像画でもよい絵であればいいわけです。／山の絵を描こうとする人は、時にはできるだけ風景画としての山の画面の中から、脇役的なものを排除して、むしろ山の「胸像」を描くようなつもりで、山と取り組んでみて下さい。(中略) もっとも、画面の中に小道具を適当に配置しなければ、構図として成立しにくいような場合もありますが。

【牧潤一著『レッツ・スケッチ 山の絵教室』（日貿出版社、1993）】

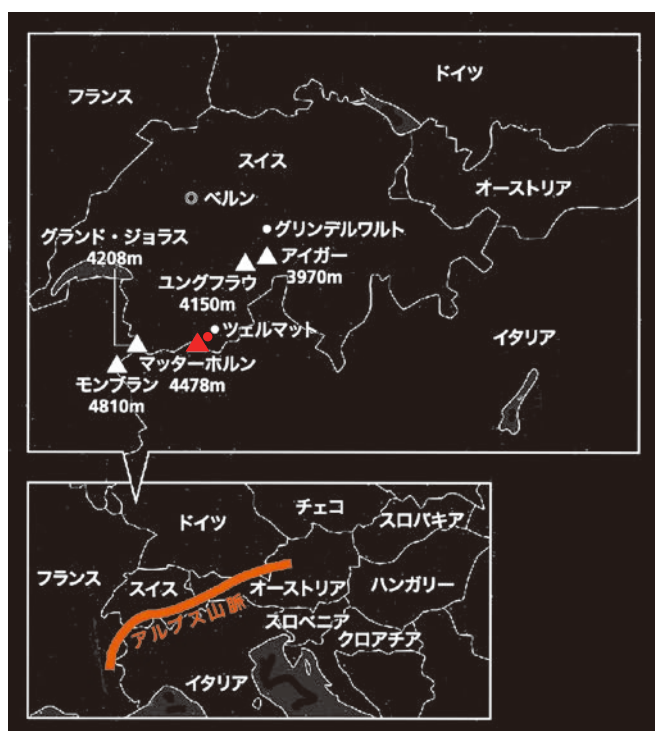
この作品はスイス側から夜明けのマッターホルン（標高4,478m）の姿をとらえて描いたものである。鋭角に聳（そび）える美しい独立峰の山容を持ち、アルプスを象徴する山のひとつとされるマッターホルン。そのマッターホルンについて、潤一は次のように記している。

アルプスの盟主たるその颯爽（さっそう）たる姿、ウインパー（原文ママ）による初登頂（1865年）と下山時に起きた大悲劇などで、これ程世界中に知られた山はないであろう。チョコレートの箱のラベルとしてさえお目にかかる。(中略) イタリア側から見ると別の山かと思える程で、また捨て難い味がある。

【牧潤一「世界の名山36峰ペン画集」作品解説「③マッターホルン」の項より】

19世紀後半、ヨーロッパの本場アルプスでは近代登山の黄金期を迎え、名立たる4,000m峰への登頂が次々と成功していくなか、マッターホルンは挑戦者たちを拒み続けた。そんな難攻不落といわれた山の初登頂に成功したのがイギリス人登山家で挿絵画家でもあったエドワード・ウインパーらの一行であった。しかし、栄光の初登頂から一転、下山中にザイルが切断して4人が墜死するという悲劇に見舞われた。

今年2015（平成27）年は、ウインパーらによるマッターホルン初登頂から150周年にあたり、現地スイスでは麓の山村ツェルマットを中心にさまざまな記念事業やイベントが予定されている。



モチーフ：マッターホルン

（撮影場所：スイス シュヴァルツゼーからヘルンリヒュッテに至るハイキング道）

【朝岡一郎氏撮影・提供】



16－ 牧 潤一《暁のマッターホルン》
1994(平成6)年 油彩・キャンバス 162.1×112.1cm 当館蔵

牧 潤一 MAKI Junichi

1928(昭和3)年～2011(平成23)年
宮崎県出身
季風会、日本山岳画協会に所属

Ⅱ 山岳画家が愛用した登山道具 当館蔵



1-足立源一郎使用 地形図

L46 × W47cm



2-足立源一郎使用 キャラバンシューズ

L25 × W10 × H25cm



3-足立源一郎使用 キスリングザック

L72 × W66 × D30cm



4-足立源一郎使用 ステッキ

L84 × W13 × T2.5cm



5-中村清太郎使用 ニッカーズボン

L94 × W35 × T3cm



6-山川勇一郎使用 ピッケル

L94.6 × W29.4 × T15.3cm

展示作品目録

ここに挙げた資料は、展示資料のうち「Ⅰ 当館・大町市収蔵の山岳風景画コレクション」の展示作品である。

No.	作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法 (縦×横 cm)	所蔵先 (保管先) ※
I-1	おおしたとうじろう 大下 藤次郎	ろくがつ ほたかだけ 六月の穂高岳	1907 年	水彩・紙	31.0×48.0	市立大町山岳博物館
I-2	よしだ ひろし 吉田 博	にほん じゅうにだい うち くるべがわ 日本アルプス十二題の内 黒部川	1992 年 (初版 1926 年)	木版多色・紙	38.5×26.5	大町市常盤公民館
I-3	いばらき い の きち 茨木猪之吉	ほたか からさわ いけ たいら 穂高 涸沢 池の 平	1943 年	油彩・キャンパス	38.0×45.5	市立大町山岳博物館
I-4	なかむらせいたろう 中村清太郎	たてやまざんせつ 立山残雪		油彩・キャンパス	65.0×80.5	市立大町山岳博物館
I-5	なかむらせいたろう 中村清太郎	ハイマツ		油彩・キャンパス	33.5×45.5	市立大町山岳博物館
I-6	なかむらせいたろう 中村清太郎	エーデルワイス		油彩・板	34.0×25.0	市立大町山岳博物館
I-7	あだちげんいちろう 足立源一郎	ひがさ にしかま お ね 日暈 西鎌尾根にて	1947 年	油彩・キャンパス	45.3×52.7	市立大町山岳博物館
I-8	あだちげんいちろう 足立源一郎	きたほたか まえほたか やりひがしかま お ね 北穂高と前穂高 槍 東 鎌尾根にて		油彩・キャンパス	45.5×53.0	市立大町山岳博物館
I-9	あだちげんいちろう 足立源一郎	つるぎだけ つるがごぜん 劔 嶽 鶴ヶ御前にて	1959 年	油彩・キャンパス	27.0×35.0	市立大町山岳博物館
I-10	やまかわゆういちろう 山川 勇一郎	ほ たかさんかい 穂高山塊		油彩・キャンパス	45.7×72.8	市立大町山岳博物館
I-11	やまかわゆういちろう 山川 勇一郎	たしろいけ 田代池		油彩・板	27.3×22.0	市立大町山岳博物館
I-12	やまかわゆういちろう 山川 勇一郎	たいしょういけ おく ほ 大 正 池の奥穂		油彩・キャンパス	31.8×41.0	市立大町山岳博物館
I-13	あぜちうめたろう 畦地梅太郎	とり もり 鳥のすむ森	1975 年	木版多色・紙	39.0×29.0	市立大町山岳博物館
I-14	あだちしんいちろう 足立真一郎	なつ つがいけこうげん 夏の樽池高原	1986 年	油彩・キャンパス	130.0×160.0	市立大町山岳博物館
I-15	ふじえいくたろう 藤江幾太郎	ヒマラヤの山村	1987 年	油彩・キャンパス	162.1×130.3	市立大町山岳博物館
I-16	まき じゅんいち 牧 潤 一	あかつき 暁 のマッターホルン	1994 年	油彩・キャンパス	162.1×112.1	市立大町山岳博物館

※当館へ寄贈された作品を含め、大町市に寄贈された美術資料は全て大町市の所蔵である。それら美術資料については大町市教育委員会生涯学習課が主管しており、市内の各社会教育施設等に保管されている。ここでは便宜上、作品の所蔵先として保管先の施設を記した。

主要参考文献

(全体共通)

中村清太郎著「日本山岳畫協會の創立に就て」日本山岳會編『會報』55 號（日本山岳會、1936）
日本山岳畫協會編『日本山岳畫協會創立六十周年記念誌』（日本山岳畫協會、1997）
大森久雄・横山厚夫編 別冊太陽 103 号「人はなぜ山に登るのか 日本山岳人物誌」（平凡社、1998）
長野県信濃美術館編 信州の風景画シリーズ 20『信州の風景画名作撰』（長野県信濃美術館、1998）
長野県信濃美術館編『丸山晚霞と日本の水彩画の流れ』（長野県信濃美術館、1998）
長野県信濃美術館編『日本の山岳風景画 一誕生と展開一』（長野県信濃美術館、2000）
町田市立国際版画美術館編『「憧れの山々展」図録』（町田市立国際版画美術館、2001）
日本山岳畫協會編『日本山岳畫協會創立七十周年記念誌』（日本山岳畫協會、2006）
長野県信濃美術館編『信州ゆかりの天才アーティスト ―長野県信濃美術館名品展―』（長野県信濃美術館、2010）
日本山岳畫協會編『日本山岳畫協會創立 75 周年記念画集』（日本山岳畫協會、2011）

I-1 大下藤次郎 六月の穂高岳

大下藤次郎著「口繪穂高山残雪寫生の旅行談及び所感」『山岳』第 2 年第 3 號（山岳會事務所、1907）
會報「大下藤次郎氏逝く」『山岳』第 6 年第 3 號（日本山岳會事務所、1911）
大下藤次郎著／近藤信行編『大下藤次郎紀行文集』（美術出版社、1986）
高階秀爾監修／原田光・川西由里編『水彩の福音使者 大下藤次郎 画集・評伝』（美術出版社、2005）
榊田倫広著「大下藤次郎の立つところ ―一〇〇年前の《穂高山の麓》を探して―」東京国立近代美術館・美術出版社編『現代の眼』608 号（東京国立近代美術館、2014）

I-2 吉田博 日本アルプス十二題の内 黒部川

吉田博著『高山の美を語る』（實業之日本社、1931）
吉田博・白旗史朗著／講談社出版研究所編『山の絵本 日本アルプスと富士』（講談社、1981）
吉田博著『吉田博 全木版画集』（阿部出版、2005＝第 2 版 3 刷）
安永幸一著「生涯が山とともにあった吉田博の山岳風景画」『岳人』No.770（東京新聞出版部、2011）

I-3 茨木猪之吉 穂高 涸沢 池の平

茨木猪之吉著『山旅の素描』（三省堂、1940）
茨木猪之吉著 コマクサ叢書第 12 卷『山の画帖』（朋文堂、1959）
高野鷹藏著「茨木猪之吉君の追憶」日本山岳會編『山岳』第 55 年（日本山岳會、1961）
池田町立美術館編『山旅への憧れ 山岳画家 茨木猪之吉展』（池田町立美術館、2002）
関悟志著「山岳画家 茨木猪之吉」市立大町山岳博物館編『山と博物館』第 47 卷第 11 号（市立大町山岳博物館、2002）

I-4・5・6 中村清太郎 立山残雪／ハイマツ／エーデルワイス

中村清太郎著「畫筆を擱いて 一山籠りの覺え書き一」『山と溪谷』第 50 號（山と溪谷社、1938）
中村清太郎著『山岳涸仰』（生活社、1944）
中村清太郎著 コマクサ叢書第 15 卷『ある偃松の独白』（朋文堂、1960）
小池義清著「中村清太郎先生のこと (1) 十年の思い出を」『岳人』No.247（中日新聞東京本社、1968）
『世界山岳百科事典』（山と溪谷社、1971）
中村凉三著「遠去かりて大いなる峯あり 一古い山の人、中村清太郎のこと一」大町山岳博物館編『山と博物館』第 28 卷第 5 号（大町山岳博物館、1983）

I-7・8・9 足立源一郎 日暈 西鎌尾根にて／北穂高と前穂高 槍東鎌尾根にて／劔嶽 鶴ヶ御前にて

河口湖美術館編『「回顧」足立源一郎展』（河口湖美術館、1998）
長野県信濃美術館編『アルプスを愛した山岳風景画家 足立源一郎展』（長野県信濃美術館、2001）
足立朗編『画家 足立源一郎の記録』（三好企画、2002）

I-10・11・12 山川勇一郎 穂高山塊／田代池／大正池の奥穂

山川勇一郎著『ヒマラヤ画集』（山と溪谷社、1959）
「アンデスに散った山川画伯の遺作展」（1966 年 2 月 25 日付『讀賣新聞』夕刊）
読売新聞社主催『アンデスの氷河に眠る 山の画家 山川勇一郎遺作展』（1966）※パンフレット
「特集『山川勇一郎スケッチ展』」大町山岳博物館編『山と博物館』第 40 卷第 10 号（大町山岳博物館、1995）
世田谷文学館編『『日本百名山』の深田久弥と山の文学展』（世田谷文学館、1995）
古原和美著『山 80 年の回想』（プラルト、2011）
深田久弥ほか著『愉しき山談義 深田久弥対話集』（幻戯書房、2014）

I-13 畦地梅太郎 鳥のすむ森

畦地梅太郎著『山の出べそ』（創文社、1966）
畦地梅太郎著『山の足音』（創文社、1969＝第 3 刷）
畦地梅太郎著 平凡社ライブラリー 313『山の眼玉』（平凡社、1999）
池田町立美術館編『山の版画家 畦地梅太郎展』（池田町立美術館、2002）
別冊太陽『山の版画家 畦地梅太郎』（平凡社、2003）
市立南アルプス芦安山岳館編『ヤッホー！がきこえてくる 山の版画家 畦地梅太郎』（市立南アルプス芦安山岳館、2004）

I-14 足立真一郎 夏の梅池高原

足立真一郎著 新ハイキング選書第 7 卷『山旅素描』（新ハイキング社、1988）
「特集「日本山岳画協会展」」大町山岳博物館編『山と博物館』第 39 卷第 7 号（大町山岳博物館、1994）

I-15 藤江幾太郎 ヒマラヤの山村

北荘画廊制作『藤江幾太郎 山の画集』（北荘画廊、1980）
北荘画廊制作『藤江幾太郎 表紙画集』（北荘画廊、1984）
北荘画廊制作『藤江幾太郎 ネパール画集』（北荘画廊、1990）
藤江幾太郎著「ネパール油絵展（一九六八～九二）」大町山岳博物館編『山と博物館』第 37 卷第 7 号（大町山岳博物館、1992）

I-16 牧潤一 暁のマッターホルン

白樺高原美術館企画・制作『白樺高原美術館収蔵 牧潤一・山岳画集 8000m 峰 14 座を中心として一』（ルミエール、1990）
牧潤一著『レット・スケッチ 山の絵教室』（日貿出版社、1993）
「特集 世界三大山岳風景 360 度パノラマ完成記念 牧潤一・山岳画展」大町山岳博物館編『山と博物館』第 42 卷第 7 号（大町山岳博物館、1997）
牧潤一「世界の名山 36 峰ペン画集」作品解説 ※リーフレット
杉田博著 追悼「牧潤一さん」『山岳』第 107 年（通巻 165 号）（日本山岳會、2012）

謝 辞

企画展にあたり、下記の皆様方から、貴重な資料や写真、情報のご提供など、多大なご協力・ご教示を賜りました。

ここにご芳名を記して、心より深く感謝の意を表すとともに、厚くお礼申しあげます。

茨木岳人 上原達宏 小林貞幸 朝岡一郎 田村宣紀 大町エネルギー博物館 大町市常盤公民館
(順不同、敬称略)

あとがき

2014(平成26)年3月、当館は創立60周年記念事業のひとつとして、常設展示改修を実施しました。3階から1階までの各フロアを用いた新しい常設展では、「北アルプスの自然と人」をメインテーマとし、自然科学・人文科学の両視点から、後立山連峰を中心とした北アルプスを総合的に紹介しています。

こうした常設展に加え、1階特別展示室では、年間を通じて企画展や特別展を随時開催しています。企画展等が開催されていない期間中は、「山と美術 — 山岳風景画とウッドシャフトピッケル — 」と題し、山岳風景画作品のほか、機能美を追求して美術品の域まで高められた登山道具として、古典的なウッドシャフト(木製の柄)ピッケルを展示しています。

人文科学系の常設展に関しては、展示改修にあわせ、展示内容を詳しく解説した解説書『山と人 北アルプスと人とのかわり』を当館で編集・発行しました。しかし、「山と美術」展示コーナーについては、常設展示ではないことから、常設展の解説書では扱いませんでした。今回の企画展における展示資料は、「山と美術」コーナーに展示する美術資料と大半が同一ですが、ひとつの企画展としてあらためて展示を組み立て、展示する美術資料に関する資料情報を収集・整理しようと試みました。具体的な資料情報としては、描かれた山岳風景の場所を特定したいと考えました。また、作画当時のエピソードや、描いた画家が持ち合わせていた山に対する思いなどについて、作者自身が残した“ことば”から探ってみたいと考えました。本展および本書が、必ずしも十分な成果としてまとめることができたとは思いますが、ご覧になる皆様方が山岳風景画の持つ世界観を感じ取って楽しんでいただくことができれば幸いです。

最後に、本展の企画意図は、教育普及面の効果のほかにも、当館を含めた大町市が収蔵する美術資料において、山岳風景画という分野での体系的な資料群(コレクション)化を図り、ひとつの資料群としての資料価値を高めたいということからでもありました。今後、同様にして収蔵コレクション展を資料群ごとに企画して継続実施することで、当館収蔵資料の全体像を把握して再分類・整理を行い、資料情報をさらに加えて、資料群としての価値を高めていければと考えています。こうした一連の作業は博物館活動の根幹をなす重要なものであり、その成果を調査・研究活動や教育普及活動に供することができれば、当館の博物館機能と魅力が一層高まりえるものと期待しています。

(編集担当 記)

平成27年度 市立大町山岳博物館 企画展

山岳風景画の世界 — “山 博” 收藏コレクション —

発行日 2015(平成27)年 7月18日
発行/編集 市立大町山岳博物館
〒398-0002 長野県大町市大町 8056-1
TEL: 0261-22-0211 / FAX: 0261-21-2133
E-mail: sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL: <http://www.omachi-sanpaku.com>
印刷・製本 株式会社 奥村印刷所
〒398-0002 長野県大町市大町 2470
TEL: 0261-22-0205 / FAX: 0261-22-1345



2015